

得ないのは已むを得ないことである。幼稚園を、ほんとうに子どもの生活の自然味の中に置き得るのも置き得ないのも、朝にあると言つてよい。而して、幼稚園を子どもの生活と別ものにはしないにしても幼稚園の中に子どもの生活を置くか、子どもの生活の中に幼稚園を見出すかの、極くこまやかな違ひが一つに懸つて朝にあると言ふべきである。

幼稚園の朝については、餘程こまかに研究せられる必要がある。

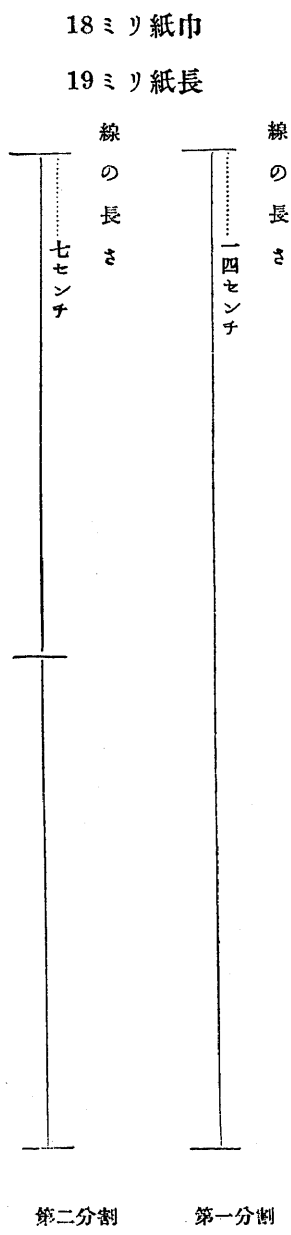
幼児の目測に関する研究（一部）

神戸幼稚園

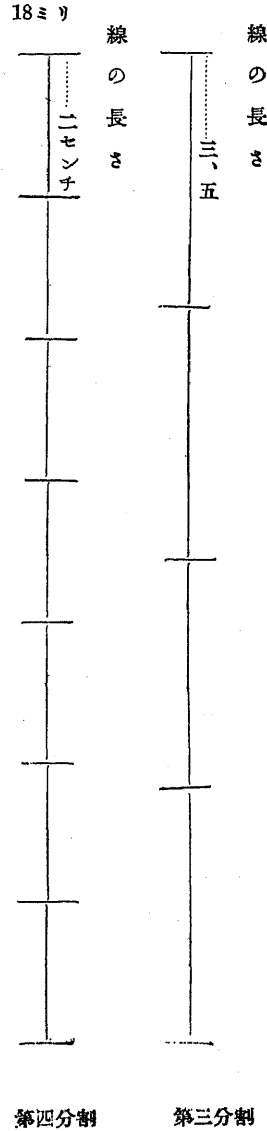
本研究は、我幼稚園児について、種々の長さの直線の中心を求めしめ、其二等分判断の正確度によつて、幼児の長さに対する目測と、それに伴ふ意志活動の特徴を吟味しやうと試みたものであります。

分割する直線の長さは、一四センチ、七センチ、三、五センチ、二センチの四種であるが、第一圖に示す様な用紙に印刷したものを用ひ、是等諸線の二等分を、各第一第二、第三、第四分割の名稱を用ひました。

實驗操作は、本園の各保育室の机上に、右の試験用紙をのせておき、児童をひとりづつ椅子に坐らせ
 「此線の真中に点をお入れなさい」と言ひ、「真中」といふ事を理解しない場合には、保母自ら線分割を行
 つて、左右の等しい事を説明し、又は紙を折つて説明した場合もあります。「真中」といふ事を理解しな
 かつたのは、五歳児（幼組）の約半数です。六歳児には一人も解らないものはありませんでした。右の通
 り仕事の性質が理解せられた後、鉛筆を児童に與へて分割を行はしめたのですが、此場合保母は、児童
 の傍にあつて、其作業を注意してゐました。被験者たる、本園の幼児数は、男兒七十六名、女兒六十八
 名でした。實驗者は各組の受持保母各自が是に當りました。此實驗は大正十二年十月廿二日（晴）午前
 九時半に、第四分割について試み、翌廿三日（晴）午後一時に、第一、第二、第三分割について行ひま
 した。



第一圖
(實驗用紙)



實驗の結果を述ぶる前に、實驗中に注意しました二三の事項を摘記しやうと思ひます。

兒童の線分割に對する態度は、線の左右を見較べて充分に慎重なる注意を行つたものと、無雜作に始ど何等の考慮をも拂はずに遂行したものとあります。これは、兒童の個性と多く關係があります。

第四分割を行はしめた場合には、第一、第二、第三分割の場合より、やゝむづかしいといふ印象を與へた様です。例へば長組で「むづかしいなあ」と言つたものがあり、幼組でも同様に言つた事です。實驗作業に對する子供の感情的態度は、幼組は、始め心配さうにしたものが多數見受けられました。けれどもそれは、嫌ひな爲ではなかつたのです。長組の幼兒は非常に喜んで致しました。

既に述べた「真中」の意味の解らないものが五歳兒に半数以上、六歳兒にはそれを見受けませんでした。

表 一 第
(兒 男)

姓 名	第一分割	割第二均分	錯同平差均	割第三均分	同錯差	割第四均分	同錯差
八木源市	7.5	12.5	7.5	17.5	12.5	20.	2.9
柴崎忠明	5.0	0.	0.	13.8	5.6	10.	6.5
上田一夫	60.	40.	7.5	23.8	11.3	12.9	9.8
烏崎四郎	90.	47.5	12.5	13.8	6.4	10.7	5.3
笹 實	45.	47.5	15.	23.8	11.3	11.5	7.9
佐々田輝夫	85.	55.	17.5	16.3	9.4	13.4	3.1
谷川捨男	45.	32.5	2.5	12.5	7.5	8.6	5.5
山下眞一郎	40.	37.5	2.5	26.3	11.3	19.9	9.2
烏丸和三郎	35.	2.5	25.	18.8	6.6	5.7	5.3
由野精亮	20.	50.	22.5	7.5	7.5	10.	2.9
住川義久	30.	22.5	2.5	15.	7.5	14.3	6.6

(兒 女)

姓 名	第一分割	割第二均分	錯同平差均	割第三均分	同錯差	割第四均分	同錯差
谷 齋江鳩	20	42.5	17.5	01.	7.5	8.6	4.5
大鳥雪子	40	27.5	7.5	20.	7.5	8.6	6.5
吉田千代子	35	7.5	2.5	16.3	6.3	8.6	10.8
楠本照代	90	75	4.5	11.3	11.3	5.7	7.
柳生澄子	50	25	25.	2.3	3.8	6.4	4.9
増田孝子	55	50	25	27.5	15	15.7	5.9
小西縫子	65	32.5	17.5	7.5	5	8.6	4.5
佐野光子	5	42.5	32.5	20.	5	12.1	4.5
佐々木登志子	40	25	15	3.8	3.8	2.9	2.5
米田艶子	0	15	15	21.3	9.4	3.6	3.1
樽井たれ子	35	15	15	27.5	10	9.3	5.3
佐相やす子	20	17.5	12.5	5.	5.	7.1	3.9
武智喜美子	25	2.5	2.5	3.6	6.9	10.7	5.8

分割の際一度線を引いて、「間違つた」と言つて更にやり直したものは、後の方を採用して計算しました。

實驗の結果は、各組及び其性別に従つて、四種の分割の誤差の値を計算しました。それは第一表に示す通りであります。

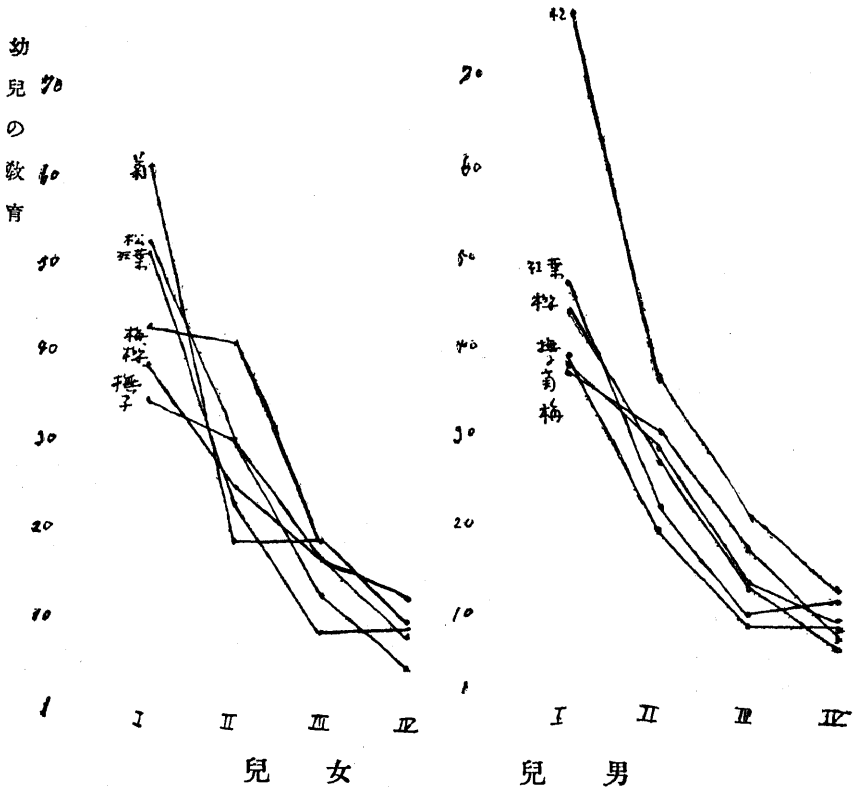
右の結果を通覽して注意すべき事項と考へますのは、是等の四種の分割に於ける「誤差」の相違であります。即ち直線の長さが違へば、判斷の誤差の値が違ふ事であります。

二等分せんとする線の長さの違ひに由つて、判斷の誤差が如何に變化するかといふ事については、第一表の如く、線の長さが短くなるに従つて、誤差が少くなります。其結果を圖に示しますと、第二圖にある通りの拋物線を描きます。

然し乍ら、此四種の分割の關係は、一々の結果について申しますと多少の例外があります。各個人について吟味してみますと、各分割の誤差が、線の長さが減すれば減するもの（第一型）と、第二の長さ（即ち七センチ）の分割が最も困難で、それより長くとも短くとも誤差は減するもの（第二型）と、及び四種の分割相互に著しい相異がないもの（第三型）とがございます。此他に便宜の爲、不規則なものを第四の型として、以上四種の種類があります。しかし男兒に於ても、女兒に於いても、第一の型に屬するものが最多く、第二の型がこれに次ぎ、（暫く第四の型をおいて考へると）第三の型が最も少數です。換

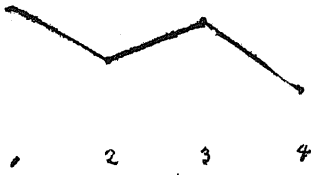
圖 二 第

(圖 一 第) (圖 一 第)

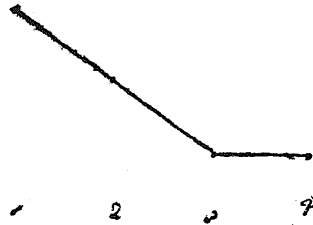


言すると、分割せんとする線の長さが大であればある程、二等分の判断が困難となる傾向があるといふ事が出来た。

次に考へてみたのは、右の諸種の分割に於ける誤差が、其各々の直線の長さに対して、如何なる比例を有つてゐるかといふ事であり、それは第二表に示してあります。即ち四種の分割とも、殆ど同じ値と言つて差支へない様でございます。是はどんな事實を意味

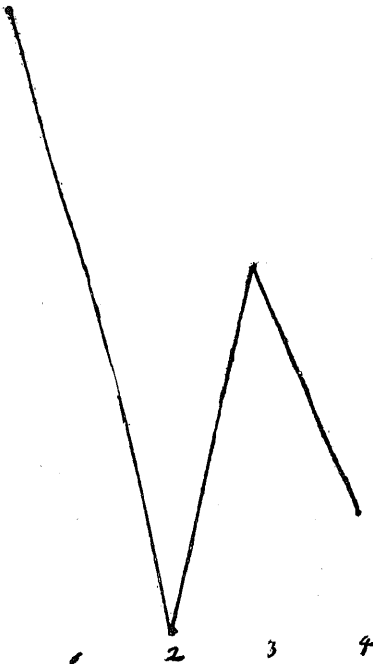


(型三第)

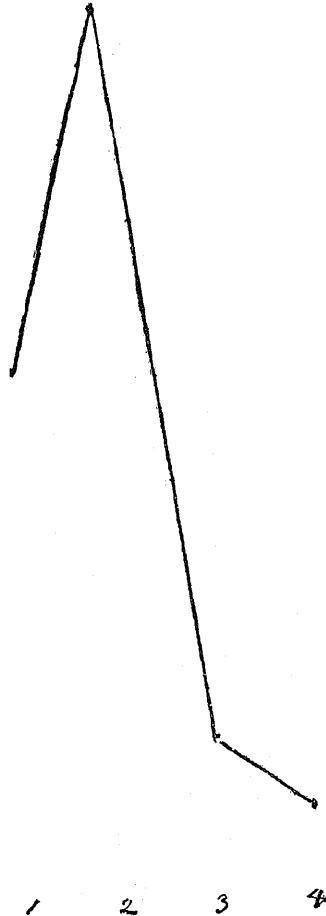


(型一第)

しませうか。



(型四第)



(型二第)

表 二 第

組	第一分割	第二分割	第三分割	第四分割	
男	松	0.04	0.05	0.05	0.06
	撫子	0.03	0.05	0.04	0.03
	菊	0.03	0.02	0.06	0.06
	櫻	0.03	0.04	0.05	0.04
	梅	0.03	0.06	0.06	0.05
	紅葉	0.03	0.03	0.03	0.04
女	松	0.04	0.05	0.06	0.05
	撫子	0.03	0.05	0.03	0.05
	菊	0.05	0.05	0.05	0.06
	櫻	0.03	0.04	0.04	0.04
	梅	0.03	0.04	0.04	0.04
	紅葉	0.04	0.04	0.04	0.03

幼
兒
の
教
育

男

女

思ふに此『誤差と二等分する線の長さとの割合が一定してゐるといふこと』は次の様に言ひ得ます。

「各分割とも相対的誤差の値が同一であるといふ事は、其作業——種々の長さの直線の二等分といふ作業に對し、幼児が平均な注意を働かせた結果であることを示すものである」と言ひ得るのでございます。

中央點の判斷が左方か右方かの何れかに偏るといふ事實

表 三 第 三
兒 男 組 各

		第一分割	第二分割	第三分割	第四分割	
松	+	7	4	4	1	16
	-	4	3	3	1	11
	±		3	4	9	16
	○		1			1
撫子	+	3			1	4
	-	7	5	6	2	20
	±		5	4	7	16
	○					
菊	+	11	3	2	2	18
	-	2	6	4	2	14
	±		4	7	9	20
	○					
櫻	+	12	5	5	4	26
	-	3	7	1		11
	±		3	9	11	23
	○					
梅	+	5	3	3	4	15
	-	6	4	3		13
	±		5	6	9	20
	○	1				1
紅葉	+	8	4	5	6	23
	-	8	1	3	4	26
	±		11	8	6	25
	○					

は第三表に示しておきました。
 +は分割せんとする線の中央から左方に脱逸したもので、-はその反対で、±は不規則、○は脱逸なく正中央の判断を示します。左方脱逸は男児が多いが女兒は右方脱逸が多い傾向がありました。いづれがいづれであるといふ断言は此研究では出来ません。とにかく左右何れかに偏る傾向があることは確でございます。

表 三 第
兒 女 組 各

	第一分割	第二分割	第三分割	第四分割		
松	+	6	3	3	1	13
	-	6	4	1		11
	±		5	8	11	24
	○					
撫子	+	3	1	4		8
	-	3	2	2		7
	±		4	1	7	12
	○	1				1
菊	+	4	6	9	3	21
	-	8	4	3	1	18
	±		4	2	10	16
	○	1				1
櫻	+	4	3	4	2	13
	-	8	4	5	3	20
	±		6	4	8	18
	○	1				1
梅	+	4	3	4	2	13
	-	8	4	5	3	20
	±		6	4	8	18
	○	1				1
紅葉	+	7	2	4	3	16
	-	4	1	5	4	14
	±		8	2	4	14
	○					

以上述べた所を概括しますならば、目測は線の長さが増せば増す程困難となるのが通例であります。第一分割が最も誤差が大で、第四分割は誤差が最も小であります。然し場合によつては例外もあります。上述の第二の型、第三の型の如きであります。

此誤差の値を線の長さをもつて除した結果を、「相対的誤差」と名づけます。それは各分割とも殆ど同じ値を示します。(第二表にみる處の如し)この事は、各分割に於ける精神機能が、平等に働いてゐる事

を意味するものであると考へられます。

線の二等分割は、中央から左右何れかに、規則的に偏る傾向があります。勿論それは線の長さが短ければ、此脱逸も不規則ですが、或程度以上長くなれば、各個人によつてほど左右何れかに一定します。然し左右何れの傾向が多いかは、此報告の事實では斷言出来ません。」

以上

果 物

日あたりに

子守があかい頬べたをして

枯れ木の下の本チで

膚にあかい艶のある果物をかじつてゐる。

燃えるやうな頬べたで

あまい汁をすすつてゐる。

あしもとに乾反つた蜜柑の皮が落ちてゐる。

(室 生 犀 星)